伊藤信夫君に就て

田　辺　三　重　松

伊藤君は函館の産で昭和40年生れ，私と同じく函館商業学校を卒業後札幌で鉄道省に入り，後に陸運局に転じて今日に至つている。

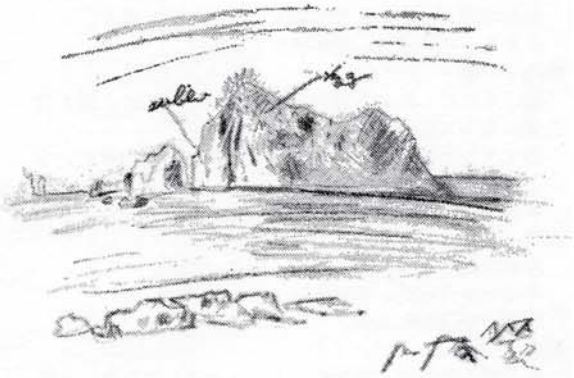
画業は最初春陽会に出品していたが後二科に移り，終戦の頃は会友となつた。行動美術が創立されると推薦されて出品し，3，4年の後に会員に推挙されたのである。

函館では私の家と君の家とは近かつたし，君の父君が私の家の手伝いをして居られた関係で，君は幼年の頃から私の家に出入していた。商業学校入学の準備学習を見るやら一緒に写生に連れて歩くやらしたものだつた。従つて私の考え方がいつしか伊藤君の考え方になつている事もあるように思える。私は今日まで酒を飲まないが，これは禁酒でなくて，飲めないのである。伊藤君も飲めないというより，好きでない方の側であつた。趣味は私より一本調子でなかつたようだが，然し何かと共鳴する事が多く，君と語る事はこの上もない楽しみであつた。自然交通も多く二科時代の頃の来書の半分は伊藤君からのものであつた。

私は君と話していつも感じた事は，君には嘘がない事と，愚痴の無い事だつた。そして不正に対する激怒はあつても他人の過失に対して非常に寛大で，同情的であると共に，その過失を整理し処理する苦労までしてやるという風であつた。それに物事をいいかげんにしておけぬ性分で，局の仕事を充分やつて会の仕事も整理し，その上で絵を描くという事はあの弱い身体の君には，大変な過重であつた事だろうが君の信念と責任感，そしてそうする事が好きなといつては失礼だが，仕事をやり遂げる快感というふうなものを持つてたのではなかつたか。いくら伊藤君と共鳴し論議しても，この実際面の運行だけは，私には到底出来ぬ事柄であつた。

君は所謂フアインプレーをする素質ではなかつたから，派手に画壇にアピールする事をしなかつたようだが，然し年を増す毎に何かひたむきなものが表われて，近頃は愈々本腰をあげると感じさせてきた。おそらく君は停年という機会のために仕事と画業とを綿密に計算して，新しい第3の人生を打ち樹てようとしたのではないだろうか。不幸にも今度の病気だけは君の計算の外にあつた。何の運命か病は君の最も嫌いな癌だつた。君の自覚している病弱とは，全く違う病気だつた。信じさせてはならないこの病名故に奥さんや私共少数の者達は，秘めるだけ秘めたのである。君の計画と計算は，臥床中でも希望となつていた筈である。おそらく第3の人生の為め一日も早く床を払つて，画業一本の夢を抱いたまま永遠の旅に立たれたのであろう。

君の病あつき頃，私は東京に出る運命にあつた。臨終にも逢えず，葬送もかなわない事まで，何か運命のような気がする。それにしても信義に厚く，友情に堅い，君を想うて甚だ淋しく哀惜極りないのである。



紙製品事務用品文房具販売

株式会社 服部紙店 札幌支店

札幌市大通西二丁目

各代理店

千住製紙株式会社
本洲製紙株式会社
東北パルプ株式会社
十条製紙株式会社
北日本製紙株式会社
苫小牧製紙株式会社